



リチウムイオン電池火災に注意



依然として増加傾向にある模様です～政府広報ウェブより引用

私たちが使っている電化製品の多くは「リチウムイオン電池」が使用されています。リチウムイオン電池は軽量で寿命が長いことから、スマートフォンやモバイルバッテリーなどに活用され、今や生活に欠かせないものとなっています。しかし、使用後は正しく処分しないとごみ処理施設などでの火災の原因ともなります。

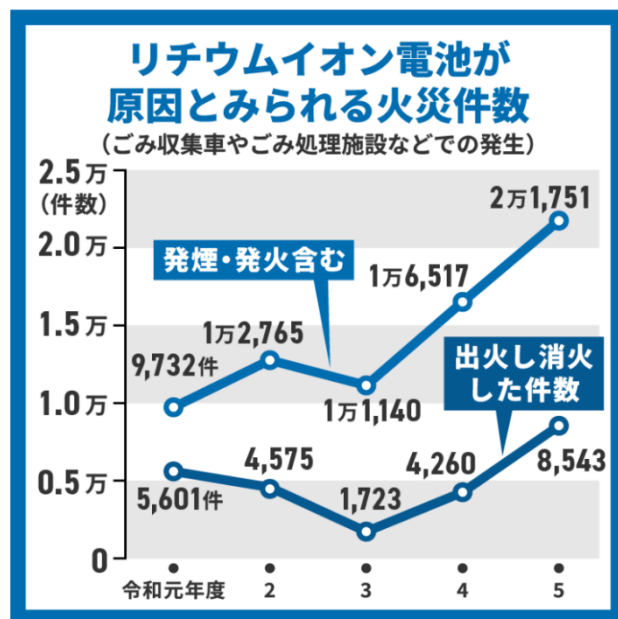
近年、リチウムイオン電池を使用した製品の増加と比例するように、火災事故等の件数も急増し、大きな問題となっています。そんなリチウムイオン電池の処分方法や、誤った廃棄による影響などを解説します。

ゴミとして処理される際に火災が発生しています

リチウムイオン電池は、強い衝撃が加わることなどをきっかけに発火するおそれがあります。リチウムイオン電池が誤った分別区分でごみに出され、そのリチウムイオン電池がごみ収集車の中で圧縮されたり、ごみ処理施設の破砕機等で衝撃が加わったりすることで発火し、大規模な火災事故につながったケースもあります。近年、リチウムイオン電池が原因とみられるごみ処理時の

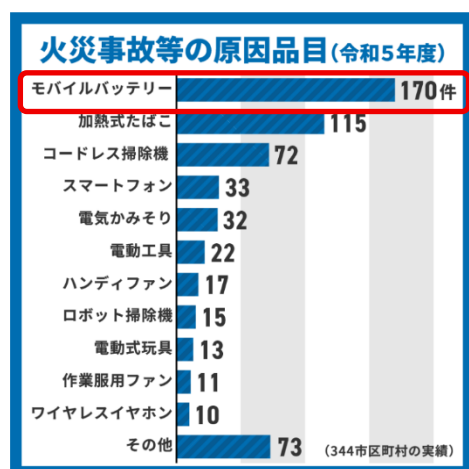
火災事故等の発生件数は増加傾向にあり、リチウムイオン電池の混ざった一般ごみから出火し、消防隊等によって消火されたケースは、令和4年度（2022年度）が4,260件だったのに対し、令和5年度（2023年度）は8,543件と倍増しています。

また、ごみ処理施設によっては、リチウムイオン電池による火災で施設の設備が破損し、復旧に数億円を要したケースや、長期間ごみの回収が停止となったケースが発生しています。このような状況は、住民にとっても大きな負担となってしまいます。



資料：環境省「一般廃棄物処理実態調査（令和5年度実績）」から政府広報室作成

火災の発生がもっとも多いのは「モバイルバッテリー」



資料：環境省「一般廃棄物処理実態調査(令和5年度実績)」から政府広報室作成

火災事故等を原因品目別にみると、モバイルバッテリーが最も多く、次いで加熱式たばこ、コードレス掃除機の順になっています。小型で安価なものや、表面がプラスチックのものが多く、それらにリチウムイオン電池が内蔵されているか分かりづらいものもあります。お使いの製品が充電することで繰り返し使用することができるもの、ワイヤレスでコンセントにつながなくても動く・光るようなものなどは、リチウムイオン電池が使用されている可能性があります。

本当にこわいモバイルバッテリーからの出火。



安全な処分方法は？

リチウムイオン電池を使用した製品を処分するときは、発火リスクを減らすため製品が動かなくなるまで電力を使い切りましょう。スマートフォンやハンディファンなど電池が内蔵されている製品は、無理に電池を取り外すのは危険です。分解せず、そのまま処分してください。

処分する際は、お住まいの市区町村の捨て方のルールを必ず確認しましょう。製品から電池が取り外せる場合や取り外せない場合によって回収方法が異なることもあるので注意が必要です。市区町村によって、「危険ごみ・有害ごみ」、「電池」や「不燃ごみ」など分別区分は異なります。詳しい回収方法は、市区町村のホームページなどで確認することができます。柏市の場合、ゴミカレンダー（沼南庁舎 1 階総務窓口にあります）や、柏市のゴミ廃棄専門アプリ(無料)「さんあーる」からも確認できます。自治体以外では、製造メーカーなどによる回収が行われています。

製品から取り外した電池などを処分するときは、一般社団法人 JBRC によるボックス回収を利用することができます。資源有効利用促進法により、リチウムイオン電池を始めとする小型充電式電池のメーカーや使用機器メーカーなどは、使用済み電池の自主回収・リサイクルが義務付けられています。これらのメーカーなどで構成される一般社団法人 JBRC は、公共施設や家電量販店などに「小型充電式電池リサイクル BOX」を設置し、製品から取り外されたリチウムイオン電池やモバイルバッテリー本体を回収しています。

お近くの回収場所や回収対象の電池などは[一般社団法人 JBRC のウェブサイト](#) から確認できます。破損・膨張したものや、JBRC 会員メーカー以外の電池は回収対象外です。処分したい電池は回収対象か、施設のどこで回収しているかなど、持ち込む前に確認しておきましょう。

(本稿はこれで終わり)